

1 はじめに

ロシアは17世紀から極東への進出を始めて、19世紀半ばになると不凍港を求めて南下を始めます。そして日清戦争後の三国干渉（1895年）の後、清国から東清鉄道の敷設権を得、旅順・大連を租借して極東経営の基地をつくります。1900年（明治33年）には北清事変を利用して満洲に駐兵し、さらに親露政権を韓国につくり朝鮮半島にも勢力を及ぼそうとしました。日本は朝鮮半島の独立が日本の安全にとつて最も重要との考えから、ロシアの介入を阻止すべく交渉しますが、進捗しません。そこで日英同盟を結んでロシアの南下を阻みます。当初、ロシアは満洲から撤兵すると約束しますが、撤兵せず、かえって増兵に及び北鮮にも駐兵します。そこで満洲におけるロシアの権利を認めることを条件に戦争を辞さぬ決意の下に対口交渉を行いました。

一方、ロシアは極東の小国日本には自国と戦う力はなく、威圧すれば屈服すると考えていました。また万一戦いが始まっても旅順艦隊は負けることは

無く、陸戦においても欧州方面の陸軍を転用すれば日本軍を撃破できると考えていました。

このようなことから日本の対口交渉は旨いはずが決裂し、1904年（明治37年）2月に日露戦争が始まります。

10倍もの国力差のあるロシアとの戦いですので、日本は「陸・海軍ともまづ極東の露軍を各個に撃破し、次いで欧州方面からの来援部隊を逐次撃破する。この間、ロシアの内政を攪乱し継戦意思を挫き、中立国の仲介により早期に和を講ずる」との短期決戦方針をとります。

そこで開戦とともに密かに明石元二郎大佐によりロシア国内の政情を不安定にさせる対露謀略工作を行わせました。また講和の仲介を依頼するため時の米大統領と大学同期の金子堅太郎を米国に派遣します。そして戦費調達のために高橋是清を欧米に派遣します。このように日本は日露戦争を戦うにあたり陸海軍はもとより政府もあらゆる方策を尽くしつつ国運を賭して戦いました。このような意識は民間の人にも共有されており、いわば軍官民一体の挙国一致の戦いだっただけです。そこで今回は、挙国一致の事例として一市井の漁民も使命感を持って国の戦いに協力した「久松五勇士」のお話を紹介しましょう。

2 日本海海戦への経緯

日露戦争において日本陸軍は日本海及び黄海を渡って兵員や弾薬等の兵站物資を戦場である大陸に送らなければなりません。このため海上の安全を確保するためロシアのウラジオストクと旅順を母港とする太平洋艦隊を撃破する必要があります。

一方、当時ロシアは英仏に次ぐ世界3位の海軍国で、その戦力は日本の3倍にのぼっていました。ただし、艦隊は太平洋、バルト海及び黒海の3方面に分散しています。ロシア指導部は太平洋艦隊のみでは日本艦隊に対抗できないと判断し、バルト海に居るバルチック艦隊を極東海域へ増派することを考えます。

日本は当然のことながら欧州方面から海軍力も増派されるであろうことを考えて、まずロシア太平洋艦隊を撃破し、海上交通を確保しつつ、その後回航されるバルチック艦隊を逐次に撃破する方針を立てます。

この方針の下、東郷平八郎中将率いる日本連合艦隊の主力は、開戦と同時にロシア太平洋艦隊をまず撃破すべく、その主力が停泊する旅順を襲撃します。しかし、戦艦2隻と巡洋艦1隻に損傷を与えたものの主力のロシア艦隊は港内にひきこもってしまっています。そこで日本軍は、ロシア艦隊を港外に

逃がさないようにするため、旅順港の入り口に船をならべて沈め、ロシア艦隊を閉じこめる閉塞作戦を行い、以後陸上側から砲撃し撃破することにします。これを知ったロシア皇帝は旅順の太平洋艦隊をウラジオストクに脱出させることにします。この脱出間に戦いが起こったのが1904年（明治37年）

年8月10日の、黄海海戦と呼ばれるものです。この戦いでたまたまロシアの旗艦の司令塔に砲弾が直撃し、司令官が戦死したことにより、ロシア艦隊は混乱し再び旅順港に逃げ込みます。そこで乃木大将の第3軍が旅順港を見下ろす203高地を攻め落とし、旅順港に逃れた太平洋艦隊を陸上から砲撃し撃破したのです。

翌年はるるアフリカ喜望峰を回ってきたバルチック艦隊（戦艦数は日本の2倍）と1905年（明治38年）5月27日に対馬海峡で起こった戦いが日本海海戦です。

3 バルチック艦隊の回航状況と日本海軍の準備

ロシアは極東における海上の劣勢を覆すため、バルチック海にあった本国艦隊の主力で太平洋第2艦隊を編成し極東に派遣することとします。この意図は1904年（明治37年）4月末に発表されましたが、艦艇の整備が滞り、

艦隊の編成は7月4日に行われ、リバウ港の出発は遅れに遅れ10月15日となりました。

この大回航は途中に一つも自国の基地のない中、33、340 kmもの遠征という大事業でした。旅順艦隊の全滅により東航を中止させる案も出ましたが、太平洋第3艦隊を新編増加して東航を続けることにします。後続艦艇はスエズ運河を通し、この艦隊を待つためアフリカの南東にあるマダガスカル島とベトナムのカムラン湾とで日時を空費し、日本近海に現れたのは1905年(明治38年)5月末と出港後半年以上経てからでした。

一方、旅順陥落後、日本連合艦隊は一部でウラジオストクに居る艦隊の監視を行いながら、逐次内地で艦艇等の整備を行って英気を回復します。また鎮海湾に集結して砲撃を主とした猛訓練を実施します。

大回航した敵艦隊は日本近海に到着するや、きつと航海の疲れを癒すために、まずはウラジオストク港にもぐり込もうとすると考えられます。しかし日本海軍はバルチック艦隊が日本近海はどこを通過して太平洋からウラジオストクに入ろうとするのがわかりません。即ち対馬海峡を通るのか、津軽海峡を通るのか、宗谷海峡を通るのかのいずれかがわかりません。もしそれぞ

れの可能性を考えて日本海軍の戦力を分散させて待ち構えれば、日本海軍は勝利できませぬ。そこで全艦隊を一カ所に集めてバルチック艦隊と一戦を交えようとはしますが、そのためには回航するバルチック艦隊の進出状況を把握することが極めて大切です。

そこで、欧州に駐在する日本公使館付海軍武官たちに、ロシア艦船の発着をもれなく電報させます。また同盟国の英国からはスペインの沿岸まで詳細な情報を入手します。スエズ運河の通過はポートサイドにある日本郵船会社代理店からの電報で、シンガポール、東インド諸島方面は三井物産会社から情報を入手しました。

また進出状況等の報告等ができるよう長距離の通信を可能とするよう現行無線機を改良させます。そしてこの改良した36式無線通信機を各艦艇に装備させるとともに、日本近海には海底電信を敷設します。

そうこうしている間に、やつとアジアに進出したロシア艦隊は、カムラン湾で石炭を始め大量の補給物資を積み込みます。さらに5月19日には台湾の最南端から200 kmほどフィリピン寄りのルソン海峡を通過します。しかしこの位置ではどの海峡を通過してウラジオストクに向かうのが未だわかりません。にもかかわらず日本はバルチッ

ク艦隊の動きをこれ以降見失ってしまっています。

ただバルチック艦隊から分離した輸送船団が上海に入港したとの情報を入手します。このことから、ロシアは決戦を考えて、足手まといになる輸送船団を切り離したと思われ、きつと最短距離の対馬ルートを採用するのではと判断しますが、依然として日本の浮沈がかかっていますので不安は募ります。

そのような折の5月27日午前3時前、対馬海峡の西方海上で哨戒任務に就いていた信濃丸がはるか彼方に揺れ動く灯火を発見します。みにくかったので近寄ったところ、新たに他の艦艇を発見し、直ちに36式無線機により「敵艦隊見ゆ、203地点」と警報を発信します。これにより日本海軍は対馬海峡においてバルチック艦隊と決戦することとし、13時55分乙旗を掲げて戦闘開始を命じます。その結果は皆さんご存知のように、世界海戦史上にも稀な日本艦隊の完全勝利が成し遂げられたのです。

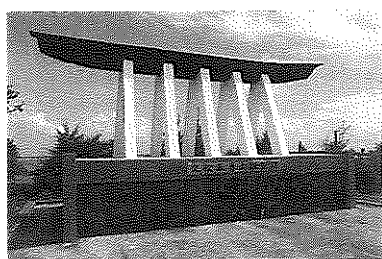
4 「久松五勇士」の活躍

話は少し戻ります。バルチック艦隊をルソン海峡以降見失った海軍は不安でたまりません。そこで沖縄や南西地域を航行している軍が契約している民間の輸送船などに

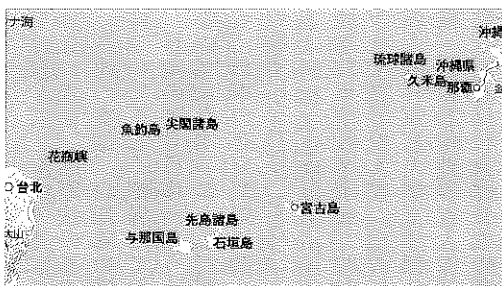
も、バルチック艦隊を見かけたらすぐに連絡するように伝えます。

各新聞は連日、「戦報」等として「敵艦隊」の動向を日本に入港する外国船等から入手すると共に、これから起きるであろう一大海戦場所の予測等も報道していました。「琉球百話」という史料に、この間のこと「尙且(ふとしたこと)にも武運拙かつたら帝国の安危はどうなるであろう。国民は只々不安と圧迫とを感じつつ一日を過(すご)していた」と書かれています。

このような中で信濃丸がバルチック艦隊を発見する4日前の23日、沖繩那覇港から貨物を積んで宮古島へ航行中の山原船が宮古島の北約80 kmの沖合(おんがせ)で、朝霧の中に黒煙をはいて通過する艦隊を目撃します。船頭は奥浜牛(29歳)でした。バルチック艦隊もこの船を見つけ捕えるためか、2隻の軍艦が



久松五勇士顕彰碑 (宮古島)



直ぐに理解し、東京の海軍の最高決定機関である軍令部に伝えようとします。しかし当時宮古島にはまだ電信施設がありませんでした。一番近くの電報が打てる場所は、南西に約170 km離れた石垣島の八重山郵便電信局です。そこで島の重役・長老達と相談し、サバニ（沖繩ハリリ）競争船に帆を張ったもの（で外洋の高波を越えて確実に石垣島までたどり着くことのできる操船技術が豊かで舟を漕ぐ強靱な体力を有する若者5名を選び、石垣島へと送ることを決めます。

ここで以降は船で行くことを諦め、島に上陸し山道を行くことにします。当時、伊原間から石垣村までの道は起伏の大きい山道で、人や馬がなんとか通れる程度の険しい約30 kmの道のみでした。青年たちはこの山道を約5時間走り続け、27日午前4時頃、八重山郵便局に飛び込みます。

伝えることが、日本の国難を救うことであると認識し、この情報を伝えることに一生懸命になったことが素晴らしいことではありますか。また宮古島の青年5人がサバニを15時間漕ぎ続け、その後山道を5時間も走って情報を伝えたその強い責任感と使命感も、これまた素晴らしいものです。

このような事例に見られるように日露戦争を遂行する日本は、軍官民一体の挙国一致の戦いをしたのです。

なお、この日本海海戦と満洲奉天における陸軍の勝利により、当時大國であったロシアに、後進国と見られていた日本が勝利し、日本は南下をつづけるロシアの脅威を阻止し、日本の安全を確立することができました。また朝鮮半島の権益を確保できた上に、満洲における権益を得ました。このことにより、日本は列強諸国の評価を高め、明治維新以来の課題であった不平等条約の改正を行うことができたのです。

選ばれたのは松原部落の垣花善（29歳）とその弟の清（22歳）、そのいとこの与那覇蒲（25歳）とその弟の松那覇蒲（21歳）（いとこと同姓同名）の漁師で、この5人が後に地名から「久松五勇士」と呼ばれるようになります。（松原）部落と「久貝」部落は一つになり、いま「久松」と称されています。

5 おわりに
信濃丸がバルチック艦隊発見の情報を打電したのは5月27日午前4時45分です。沖繩の奥浜牛がバルチック艦隊を発見したのは23日です。しかしこの情報が軍令部に伝えられたのは27日午前10時過ぎでした。一見宮古島の青年5人の苦労は無駄であったように見受けられますが、軍令部としても信濃丸の情報を確定づけるものとして有意義なものであったと思われまます。

【参考文献】
・桑田悦・前原透『日本の戦争』
・三野正洋『天気晴朗ナレドモ浪高シ』
・谷沢永一 写説『坂の上の雲』
・島袋源一郎『琉球百話』
・大阪毎日新聞（昭和9年5月18日付）
『日本海海戦秘史』

近寄ってきます。いよいよ捕虜にされると狼狽していると、彼らは、船の旗印が支那の船と似ていたことから船員全員が長髪で結髪していたことから支那人と間違えたよう引き返します。奥浜は「これは大変」と思い、すぐに一番近くの宮古島へ連絡しようとします。しかし折からの偏西風で船の操船が思うようにならず、やっと25日朝10時頃に約80 km離れている宮古島の瀬水港（現・平良港）に到着します。そして直ちに駐在所にこのことを知らせます。駐在所の内田輔松所長は、すぐに奥浜とともに宮古島の島司（区長）の橋口軍六に報告します。宮古島は大騒ぎとなります。

島司の橋口軍六は、この重大さを

き潮により船が動かなくなりまます。その

から遠く離れた沖繩の山原船の船長や、沖繩本島からさらにさらに南西に約290 kmも離れた日本の最南端に近い宮古島の一市井の人々が、バルチック艦隊の日本への進出情報を軍令部に